全体討論

司会 中島 徹

中島 それではシンポジウムをはじめさせていただきたいと思います。本日のシンポジウムに向けては、早稲田大学法学研究科博士課程の皆さんが、笹倉先生ならびに比較法研究所長の戒能先生と研究会を長期間にわたってもたれてきました。その研究会を代表して後期課程一年の高橋雅人さんに発言をお願いすることになっております。高橋さん、お願いいたします。

高橋 笹倉先生は本日のご講演のなかで、思想史を河に譬えていらっしゃいました。そしてそのことを、樋口先生そして石川先生のご議論にも結びつけてお話をいただきました。樋口先生の社会論が古代的自由につながるとおっしゃっていたことに関して、樋口先生はその通りであるとお答えになりましたが、私はその点を疑問に感じております。笹倉先生は、古代的自由について、共同体への主体的な政治参加ということを前提にされており、その背後に仲間と結合して確保した独立という自由を前提として置かれていらっしゃいます。ところが樋口先生の強調なさっているのは、集権的国家が中間団体というものを解体し、排除し、それによって論理的に個人というものを創出した特殊近代的なものであるはずで、それゆえそれが古代的自由と接合されるということに疑問を感じたのです。またさらに古代的自由といった場合でも、笹倉先生の『法思想史講義』ではギリシア的自由とローマの自由があるとされますが、ギリシア的自由ですと都市国家への直接的な政治参加、ポリス構成員が直接的に体感できるものとしての国家ということが前提とされており、この点、樋口先生が国家を他者として想定なさっている点でもはっきりと違うと思われま。またローマの自由についても、その一定のメルクマールが王政への警戒、民会の尊重、法の遵守というタテマエをとっていると笹倉先生はお書きになっていらっしゃいますが、しかしそれらは強い家長権を基盤にしていたものだったはずで

す。このことをとってみても、先ほどの中間団体の解体という観点から、樋口先生と対照的な観点に立っているのではないかと思います。以上から、笹倉先生が樋口先生をどのように古代的自由と捉えられたのかについてお聞きしたいと思っております。

さてその樋口先生の中心的なご議論についてですが、先生はかつて、権力を独占した国家が個人を創出するというモデルをルソー＝ジャコバン型とされ、それに対して所与の民主的な萌芽から多元的な社会を構成するモデルをトクヴィル＝アメリカ型として、この二つを図式化されました。その前者が、本日お話しくださった *rpublique* の論理、というふうに理解しています。樋口先生のご議論は、敢えて二つに図式化して前者を強調するというものだと考えられます。これに対しまして、今日の石川先生のご議論は明確に異なったものと見受けられます。私は石川先生のこれまでお書きになられたものを拝読して、私の勝手な石川理解というものを作らせていただきました。それをわかりやすいように敢えて簡潔に述べますと、かなり乱暴になるのですが、樋口先生の図式のルソー＝ジャコバン型とトクヴィル＝アメリカ型の二つをいわば一つにまとめあげるような試みが石川先生には見られるのではないかと、ということです。とくに石川先生は、多元的な社会というものを憲法理論が体験することの必要性を説かれていて、私が勝手に作った石川理論モデルでは、多元的な社会において主権的なものが（いわば *rpublique* のようなものが）成立できるのか、という設問を立てていらっしやるように見受けられます。そしてこの理論展開の前提となさるのが、今日お話しになられた「私」の議論ではないかと思うのです。

「私」といったとき、この場合は *Indifferenz* なわけで、国家（公共体）から無関心な領域です。樋口先生が「強い個人」と定式化なされたものとは対照的に、敢えて過剰に表現すると、石川先生は「個」人である性質について「強い」ということよりもむしろ「弱い」というところに着目していらっしやるのではないかと、思います。それがゆえに石川先生は、イェリネクが立てていた国家と国民や、公共体と私との垂直的な承認関係だけではなく、今日のお話で言えば「相互承認」、ご著書の中で言えば「水平的承認」、そういったものが必要になってくるとおっしゃっていて、また、そこには尾高朝雄の「ノモス主権論」にいうところの国家に回収されない「ノモスの世界」がヒントになるのではないかとおっしゃっているのだと思うのです。今日は、この問題と「私」の議論との関係についてうかがえるのかと思っていたのですが……。今日のお話

では、ここにさらに *Rechtsfreiheit*、権利論ではなく *status* 論としてそれを構成することができるのではないかとおっしゃっていて、その点が大変面白かったところです。しかしそれがどのように具体的に展開できるのか、展開させるのか、という点については今後の理論展開の可能性という視点から、非常に興味深い思いでうかがっておりました。

先ほどの多元的な社会と主権性との接合という石川モデルでは、「私」の領域で「多者」を作りだして、公共の場ではそれを「一者」に変えてしまうという、多元的な社会を構成する理論が作られうるのではないかと考えられます。その意味では、樋口先生の *rèpublique* の論理よりも、石川憲法学は多元的な社会構成の論理により親和性をもつのではないかと考えています。そうした多元的な「私」のなかで、果たしてその「私」は倫理的力を構成できない限り、差異を相互に認め合う他者となりえないのではないかと、という疑問が残ります。

樋口先生の本日のご講演について再度うかがわせていただきたいのですが、樋口先生は *rèpublique* の論理に関して、第一段階として権力を独占する国家というものを前提としておられます。しかし今日の状況では、官から民へと、国家がその公共性を独占していないにもかかわらず、それを民へ明け渡してしまう、ということが問題点として挙げられていました。それが具体的にどういったものが問題なのか、ということについてイメージがつかなかったため、その点を再度うかがわせていただければと存じております。

「比較史」が今日のテーマの一つでもあります。思想史の流れを河の流れに見立てられた笹倉先生の比喩が大変興味深かったので、その点について感想を述べさせていただこうと思います。このことは今日のご講演と直接関係ないことですが、憲法学にとっても、歴史の流れというものをみるのが非常に重要なのではないかと考えています。この淀川の水がどこから流れてくるのかということを考えないで、淀川に浮かぶ「くらわんか舟」でまんじゅうを漫然と食べている現代人への一つのアンチテーゼとも読取れる、ということの思い浮べたからです。

この比較史ということに関して、お三方の歴史に対する見方は、あるいは（こう言えば怒られるかもしれませんが）法律学の道具としての歴史というものについての見方は、認識においては共有されていると思うのですが、方法論の部分で非常に異なっているように思われます。それがゆえに異なった歴史の扱い方をなさっていると思うので、その点につきましてもお聞かせいただければ

ば幸いです。

それでは長い間ありがとうございました。以上、多岐にわたりましたがよろしくお願いたします。

中島 非常に多岐にわたる質問で、私には要約する能力がありません。ですので、まず、笹倉先生、樋口先生、石川先生と、順番にお答戴ければと思いますが、よろしいでしょうか。

笹倉 まず、〈フランス革命は部分権力を解体したことによって、個人の自由・権利を伸張させた〉という樋口先生の理解が古代における〈自由〉と深く関係している、というわたしの見解についてです。これは、樋口先生ご自身が、さきほどのご講演で、両者が密接に関連することをご公認くださいましたので、それでもう良いのではないかと思いますけど（笑）。高橋さんがおっしゃるように、フランス革命と部分権力の解体との関係づけ（樋口理論）の問題は、デモクラシーに関わる事柄です。デモクラシー化するためにはどうしても部分権力を解体しなきゃならない、これが古代の論理でありフランス革命の論理でもありました。この点で、高橋さんがおっしゃるように、リベラリズムの観点は古代およびフランス革命においては、弱かったわけです。

古代にも家長の自立という関係はありました。その点ではリベラルな関係が実在していました。しかし、リベラリズムが成立するのは、やはりキリスト教とか中世の世界から出て来たものとの展開に待たなければなりません。樋口先生自身は、このリベラリズムを constitutionalism として重視されていますが、それを歴史と関係させるためには、（これらキリスト教ないし中世的自由という）フランス革命の世界とは別のところに向かわざるをえないのだ、近代的自由とはそういう複合体なのだ、と思います。

ちなみに、樋口理論と連関する、フランス革命の世界の思想としては、ルソーとかかれ以前のリパブリカニズムを問題にしなければなりません。ホップズも、別のかたちではありますが、極めて樋口理論的でもあります。なぜならかれは、主権者による統治・秩序維持を重視化し、その全面的支配を打ち出すので、部分権力容認の余地をもたないからです。

以上が、高橋さんのご質問の、わたしに関わる第一の論点です。

次に第二の論点として、石川先生が本日強調された、非政治的人間の問題と、わたしの講演とがどう関係するか、という問題があります。わたしの講演では、非政治的人間をめぐる議論は直接には出て来ませんでした。しかし、わたしが扱ったキリスト教が、実はその問題に深く関わっています。また、古代

ギリシアでもヘレニズム思想においては、国家を「私」という個人によって相対化していく思想が展開します（ディオゲネス、エピクロス、ピュロンなど）。非政治の人間をめぐるこの問題については、わたし自身は丸山眞男論において中心的なテーマの一つにしました（『丸山眞男の思想世界』（みすず書房、2003年））。丸山眞男が終生をかけて説いたことの一つは、非政治的世界が政治にとっていかに大切か、という問題です。かれは政治学者ですが、〈非政治的な世界やその価値を知悉している人であってはじめて、真の政治的人間・政治家たりうる〉、と強調しました。

そもそもかれの助手論文からして、そうです。そこでは、本居宣長が、非政治的世界の価値、すなわち心情・素直な心、こういうものを見出したことによってですね、当時の江戸時代の〈政治本意主義、朱子学的儒教によって個々人が政治の全体に結びつけられていた関係〉を、結果的には崩壊させる動きをつくった、とされています。さっきの石川さんのご講演にもありましたが、倫理的・政治的な幕藩体制がまさに「盤石の体制」であったのが、それが内から解体していく、そういう運動を、宣長の思想は起こさせることになった、と。

丸山は、それ以外にもさまざまなところでも——たとえばロマン・ロラン論において——これを押し出しています。ロマン・ロランという文学者があえて政治に参加する。これを「マルグレ・モア」というんですね。自分にも拘わらず、あえて政治に関係していくのだ——自分は非政治的な稼業をする存在にすぎないのに、しかしその自分のあり方にとっても政治の帰結が無視できないから——、という意識です。丸山はこの姿勢——木枯紋次郎のそれのような——に、政治運動の本当の強さを見出しました。

法律家が法律万能となり、法律的にすべてを考えると、政治家が政治万能となり、政治上の効用・戦術だけですべての政治を考える——こういうのは丸山によれば、浅薄な発想です。かれにとって大切なのは、否定を媒介にした肯定の意識です。一旦、別の世界から法や政治を相対化し、そのうえで法や政治において闘う。意識の弁証法を地でいくこのあり方を、丸山は終生、強調したのです。

ところで、こうした意識をロマン・ロランなどがもったのは、どういう思想的伝統と関わるものなのでしょう。この点を考える場合、重要なのはやはり、〈文学・芸術・学問が権力を超えている〉という認識の伝統です。西洋の歴史の中では、第一に、キリスト教がとくにそうだと思いますけど、国家や政治を超えたものとして神をもっていました。その上で、さっきの講演でも話

しましたが、そこで展開する「愛」とか「連帯」とかによって、これまでの国家や政治を全く組み換えようという、意識も出てきた。また第二に、ユダヤ教も、古代ギリシアもローマも、ゲルマン的中世も、国家や政治を超えたものとして法を位置づけていました（「法の支配」）。この様に、超国家的・超政治的で非政治的なものが、実感としてありました。この伝統を、ロランは、そして丸山は、思想化したのですね。

石川さんは、こういう問題提起につながることを、今日お話になったわけで、それと対応する私の考えは、またいつの日か「丸山眞男シンポジウム」を開催していただければ、そのとき全面展開しようと思います（笑）。

樋口 さしあたって三点ですね。まず一点、私は「近代的自由」の主張者です。古代的自由の主張者だという意味で、受けとられているならば、それは見当がちがっていて、笹倉さんのペーパーで「中世的自由」と「古代的自由」を対比して、どちらのパターンが私の「自由」論の源流なのか、両方流れ込んでいるんだけど、よりどっちなんだろうかという文脈での話です。私の「自由」が「中世」ではなくて「古代」の系譜でと位置づけてらっしゃるのに同意したのです。言うまでもなく、バンジャマン＝コンスタンが「古代人の自由」と「近代人の自由」を二項対立で示した文脈では、その近代人の自由の方が私の実定憲法研究者としての自由です。その源流が中世よりも古典古代→ルソーだという意味です。中世が流れ込んでくるのを拒否しているわけではない、ということは先ほども言いました。「大学自治」とか「裁判の独立」という中世型自由の意味を、両方とも形骸化しつつありますけれども、そうであるだけに、決して粗末にしていいと言っているわけではない。繰り返しますけれども、私の「近代」に、中世と古代がどっちがより多く流れ込んでいるか、中世ではなくて古代だ、という意味でのことです。話のなかでも何度か出しました、1789年宣言の *homme* というのは近代が発見したものです。 *citoyen* というのはまさに古典古代に溯る系列のなかにある。この両者、 *homme* と *citoyen* が壮絶な引っ張り合いを演じてきたわけでしょう。 *citoyen* だけが独走してフランス革命の恐怖時代があったし、 *citoyen* の欠如が第三共和政の、あえて言えば退廃に導いた。彼ら自身の歴史のなかで、そしてもちろん論理としても、 *homme* と *citoyen* というのは、両立しつつ強烈な引っ張り合いをしている、ということです。

第二に、「個人」という点ですが、「強い個人」なんてどこにもないじゃないか、というのは、私自身を含めてその通りです。拷問されたらたちどころにあ

らぬことを口走るかもしれない、「強い個人」を言うのはあくまでも normative な次元でのことです。事実認識としてそんなことを言っているわけではなくて、それを前提にしなければ、近代憲法の自由、権利は成り立たないぞ、ということです。いわゆる自由権だけじゃありません。歴史を見れば一番はっきりするのは、19世紀を通して労働者が団結権を獲得するために、ああいう逞しい労働者「個人」の強さがなければ、法的な承認を得るにはいたらなかったでしょう。踏みつけられても、牢屋に入れられても、場合によっては殺されても、工場主の側の私的暴力を含めて、もちろん国家の警官隊や軍隊の弾圧に抗して闘うだけの強さがあつたから、団結権が法的に承認された。しかし一旦承認された世界に住んでいると、個人は弱いから団結しようという、団結権によって守ってもらおうということになる。戦後日本の労働運動とはいえば、もちろん戦前の逞しく闘った先人たちはいるのだけど、社会全体の構造として見れば、憲法28条で入ってきた。「弱いから団結しよう」できたから、あえて言えば、今の労働運動の停滞状態が出てきているんじゃないか。弱い個人を前提にしたらグメだ。弱いから連帯しよう、弱いから共生でいこう、というのは自己破壊、自己否定だというのが私の、実定法の歴史を見ての認識です。

第三番目に、官に代わって民が公共を「私」によって僭奪する。いみじくも石川さんのタイトルは「私」。「私」の公的な承認を求めるということですが、私は「私」が官に代わって民の名で公共を僭奪しようとしているということに、改めて皆さんの注意を喚起したい、という話だったはず。話のなかで述べましたから、繰り返しになりますけれども、立法過程でいえば、議員立法という形での私的利益の公的な承認を求めるということです。あるいは、誤解を恐れずにいえば、犯罪被害者の裁判参加は、仇討、つまり Fehde の時代に戻ろうという論理を含んでいるということに、もう少しセンシティブでなくちゃいけないんじゃないか。仇討は禁止するんだ、というのが近代国家だったはずだ。どこかの旅先でアメリカのルポルタージュの番組を見たのですが、死刑執行の前日に、被害者の家族や友人たちが集まってシャンパンで乾杯するんですね。そして当日その現場に臨む。竹矢来の中での処刑を弁当を持って見に行っていた時代に戻るのか。犯罪被害者の正当な利益、権利を私はないがしろにしているわけでは決してありません。そうじゃなくて、官に代わって「私」が公共を背負いすぎるのじゃないか、ということです。その例に限らず、中身の点で言えば賛否はもちろん両論ありますけれども、郵政民営化から国立大学の民営化まで、それから先ほども申しましたけれども、迷惑は

ごめんだ、迷惑からの民の自由、ということで自分のアパートの郵便受けにビラを入れてもらうのは困る、取締ってくれ、これはまさに民の名による公共的主張でしょう。あるいは、安心して歩けるようにビデオカメラを要所要所につけてくれ、その他数え挙げれば、あなた方の生活、現実生活の周辺を、そういう観点を入れて改めて見廻してご覧になれば、かつて官が公を独占していたとすれば、官に代わって民が、公共を「私」の名において主張している現状、というものに対する批判的な観点が出てくるはずだと思います。

とりあえずこの三点です。

石川 中島さんから、今回のシンポジウムに備えて皆さんで大変勉強して下さっている、という噂はうかがっておりました。本来ならばその期待に応えるような報告をすべきだったのかな、という気もするんですけども、ちょっと天の邪鬼なものですから、そういう期待は裏切りたい、という気持ちがありまして、非常に質問のしにくい報告をしてしまった、という点を最初にお詫びしておきたいと思います。当初頂いたテーマは「自由と特権」なんですけれども、いくらなんでもそんなベタなテーマは厭だ、とお断りしたところ、じゃあどうするか、ということになり、随分漂流することになってしまったわけなんですけれども……。何が出てくるかわからないなかで、いろいろ読んでいただきましてありがとうございました。

何点か、あまり多くなりすぎないようにお答しようと思います。まず第一に「強い個人」という表象についてです。樋口先生のおっしゃる「強い個人」というのは、権利能力の問題、それから行為能力の問題、さらにはモラルフォースの問題、これらのごっちゃになった観念であって、本来分節化すべきなんだというのが私の考え方です。もちろん分節化すれば説得力が増すとは限りませんので、「強い個人」という言い方がそれ自体、強いモラルフォースを持っていることは私も認めるんですけども、やはり混濁した言い方ではないだろうか、と思うわけなんです。権利能力というのは、近代人には皆、平等に分け与えられた仮面でありまして、しかもこれは血の通わない鉄仮面です。人権というのは、その血の通わない論理の最たるものでありまして、「人間」などというのっぺらぼうな仮面にだけ権利を発生させるという、まことに血も涙もない発想だということがあるわけなんです。その上でしかし、その鉄仮面を被っているのは、あるいは支えているのは、生身の人間であるわけですから、生身の人間がそれをどう支えるのかという問題は当然出てくるわけで、伝統的にはこれは行為能力論として解決されてきた問題であるわけです。さらに、生身

の人間である以上、まず身体のレベルが問題となるわけですし、その上で身体を傷つけられることはなぜ、その人間にとって決定的なダメージになるのか、という問題を考えていくと、先ほど話題になった拷問はなぜいけないのか、という問題につながっていくわけですね。そして、自由を語る以上、あるいは権利を語る以上はモラルフォース抜きで権利というのは実はありえない。しかし法と道徳を分離するというのが、近代法学の知恵でありまして、それほど容易にこれらを結合することはできないわけです。ですから、分けてしまってもったいない話になるかもしれませんが、やはり本来の議論はそのようにして分節しなければいけないだろう、ということです。

それから二番目に、「私」が民の名で権利を構成しているのではないかということ、これは民か官か、「私」か「公」かという問題ではなくて、これはやはり order つまり秩序の問題であるだろうと思うんですね。その order が設定されることによって「私」が官を占奪することは許されない、ということにもなるわけで、やはり秩序選択が論理的には先行するはずだ、ということをごここでは申し上げておきたいと思います。私が先ほど主題化したのは、それとは区別された領域として、「私」を公的に承認するという別の次元の話であるということです。

それから三番目に、これもご質問に関係すると思うんですけども、多元的社会における主権性の成立可能性というのが私の設問だろうというのは、これはおっしゃる通りです。その中で自ずと出てくる問題はですね、やはり社会が多元的であるという現実をどう受けとめるかということで、それはもう無視してしまえばいいんだ、と考えるか、それを前提にして議論せざるをえないんだ、と考えるか、ここは大きな分かれ目であるだろうと思います。そして多元的社会を前提にして議論するとなると、多元的単位を法学的にどう認識するかという問題が起ってきて、今のところわれわれがもっている認識単位というのは「ステータス」しかないのではないか、という話になるわけです。そして自由論を語るとなると当然、今日は政治哲学者のアイザヤ＝バーリンが、いずれの報告かには本来出てくるべきなのですけども、バーリンは積極的自由と消極的自由を語るその中間において、「ステータス」の追求という章を設けています。これは、バーリン読者の困惑の源になっているんですが、やはりステータスが入るのは当然であるというのが私の見方なわけですね。それで先ほどの話に接合する。つまり多元的社会における自由とは何であるかということ語る際に、ステータス論は、少なくとも法学者がこれを語ることは避けられな

いのではないかと、ということです。これが第三点目です。

それから、第四点。歴史に対する見方を答えてほしいということですが、どうでしょうか。これはなかなか厄介なご質問ですが、あえて、誤解を招くかもしれませんけれども申し上げておきますと、私は歴史主義者ではありません。反歴史主義者です。歴史に言及はするけれども、反歴史主義者である、ということです。反歴史主義者にとって何が問題なのか、というと、歴史哲学、少なくとも単一の歴史哲学を語ってはならない、ということです。仮に歴史を語るとしても、文字通り history, histoire を語るにしても、それは narrative の複数性を承認した上で語らなければいけない、ということになります。

それで話題になったノモス主権論ですけれども、尾高朝雄のノモス主権論というのは、単一の narrative を強制するという特性をもっていた、ということが問題です。彼自身は、歴史哲学を語る、とはっきり述べたわけなので首尾一貫しているのですが、その点では、私は反歴史主義者である、ということになります。しかし、「ノモス」を複数の narrative で語るということはありません。つまり、legal world と言いましょか、法的世界というのは、narrative によって成り立っているために、さまざまな narrative 抜きには考えられないということはあるわけです。この点で、とりわけ樋口先生を含むベテランの先生方は、戦後憲法を語らなければならない、と私は思います。それは narrative の中心にある legal community を作るためであって、ひいてはそれが、多元的なのということになるでしょうけれども、世界の構成を為していただくということになるわけです。樋口先生にもいづれたっぷり narrative を語っていただく必要があるでしょうし、それは決して自己規制力を失った年配の先生のなせることといった位置付けではなくて、そうしなくてはいけない責任があるのだ、と思います。

これだけでは全部答えたことにはなりません、さしあたり以上です。

中島 ありがとうございます。高橋さん、今の三人の先生方のお答えに対してコメントがありますでしょうか。

高橋 すべてなるほど、と納得させられてしまったんですが、ただ石川先生の最後の、ノモスを複数の narrative で語るということ、そのことが具体的にイメージできないので、その点をもう一度敷衍していただけますでしょうか。

石川 それはたとえば、日本を美しい国だ、と語る narrative はあってよいが、またそれが単一の narrative として支配してはならない、ということがあ

ると思う。また、戦後、八月革命によって日本の新しい体制ができたんだ、という narrative はあってよいし、なくてはならないんですが、それが単一の narrative として他を圧するということがあってはならない、ということになる。つまり、同じ国の constitution を語る際に、さまざまな解釈コミュニティーがありえて当然だろう、ということです。それは結局、多元的社会を前提とした承認の論理ですので、そんな複数のものはあっちゃいけないんだ、ということになると、もちろん、その一元的な社会を成り立たせるためには、特定の単一の考え方にプリコミットメントしてですね、それを皆が共有するのは当然である、ということになるのかもしれませんが。けれども、私はどちらかということ、さまざまな出自の解釈共同体それぞれに読み方があってよくて、それぞれの読み方の平和共存を考えることが大事なのではないか、というふうに思うんですね。その古典的な形式がリベラリズムであったし、そのリベラリズムがある意味、危機に瀕しているとしたら、また別の何かを考えなくちゃいけないんでしょうけど、少なくともそういうさまざまな語り方と、それからそういった世界観と、さらにはそれらのなかから中心的に出来上がるであろう規範的な世界とがですね、平和共存できることを考えるのがまさに constitutional order ではなからうか、というふうに今のところ考えている、というふうにお答えしておきます。

樋口 narrative の複数性ということに関連して申します。narrative、フランス人なら *mémoire* という言葉を使うでしょう。narrative と history の関係、*mémoire* と *histoire* の関係、という大問題があって、これらは「歴史」の見方、歴史学の方法論、さらに溯ると、人間としてどう歴史に対応するか、という大問題になりますから、いくら時間をいただいても、ここで述べ尽すことはできません。それを承知の上で際どいことを申しますが、一つの社会にとって、最小限度の *mémoire* を共有するという秩序が成立して初めて、それ以降の議論が展開される。日本の場合には、明治維新という narrative でずっとやってきたわけですね、1945年まで少なくとも。戦後はどうでしょうか。複数の narrative が競り合いつづけているというのであれば、それはそれで、是認されることですけれども、ぶつかり合ったままで、一方のみがヘゲモニーを占める状態で、祝日・元号・日の丸・君が代という *mémoire*、narrative が法制化されるというのが現状です。しかし、日の丸・君が代という内実に対する、各人さまざまであるべきような態度決定は別として、日本社会が最小限度の narrative、*mémoire* を共有することなしに、どこまでやっていけるのか。

mémoire ということにこだわるフランス人は、最近さまざまの mémoire を法律, loi memorielle, 記憶についての法律という形で定めようとしてきました。概ね研究者たち、とくに歴史研究者たちは、そうした枠組みを立てること自体に反対しています。他方では、mémoire を法律の形で定めるのは、国民代表議会の責任であるという主張もあります。今のフランスの場合には、奴隷制や植民地支配やレジスタンスという具体的な mémoire が間違えになっていますけれども、考えてみれば、フランス革命という mémoire、もう少し具体化した形で、19世紀末から20世紀初頭にかけてのドレフュス事件から政教分離闘争を経て定着した、フランス社会についての一定の mémoire は、これまで共有されてきました。それに対して違った narrative を出そうとする、たとえばル＝ペンのような極右の人は、少なくともごく最近まではとすべきですけども、mémoire を共有しないものとして、言論市場でも特別な差別扱いを公然と受けてきた。そうなるもまた特別な問題が生じますけれども、やはり何か最小限度の mémoire の共通性が、単一の mémoire の専制支配ということではなしに成り立ちうるとすればそれが望ましいのではないか。その上でさらにさまざまの mémoire が多元的に共有され、そのなかでそれぞれ自由な competition が行われる。それにしてもやっぱり一定の前提は必要なのではなからうか。少なくともいったんコンセンサスの対象となった「正統」がなければ「異端」の持ちうる創造性も出てこない。論理的に明確化できないほどほどのところで、どういう状態が作られるべきなのか。少なくとも戦後日本社会の混乱というのは、一つの mémoire を漠然としてであれ、共有しえてこなかった。そのシンボルが日本国憲法に対する世の中の見方だろうと私は理解しております。

大きな問題ですので、討論には馴染まないと思いますけれども、言いつ放して失礼ですが……。

中島 ありがとうございます。石川さん何かおっしゃりたいですか。

石川 ジャあ一つだけ。今の問題というのは、まず、人格が同一性を保つために何が必要かという古くからの問題が関わってしまっていて、たとえばジョン＝ロックは、人格の同一性を保つのは記憶である、と述べたわけですね。そうだとすると、国家という法人格に限らず、何らかの水準で、ある集団の人格性が保たれるためには、集合的記憶が必要である。集合的記憶抜きには、過去の日本、現在の日本、将来の日本を同一の人格性に包括することはできないはずだ。と、こういうことになるわけですけども、しかし、なぜ社会の同一性が

記憶のみによって支えられるのか、という問題があるわけですね。それはつまり、その社会のまさに order のあり方問題、ということになります。私は、多元的な構成により、精神の公序つまり order を極力回避する方向で考え、樋口先生の見解にも批判的に論及したのですが、先生は今、あらためて精神の order の必要性を語られたことになるわけで、見事に、今日の議論は噛み合ったんじゃないかな、と思います。

中島 ありがとうございます。今ご指摘があったように、見事に噛み合っただけで知の共同体ができたのではないかと思います。主催者側がこういうことを言うのは手前味噌なんです。実は、報告内容を相互に知らされていない、という状況で本日を迎えています。それにもかかわらず臨機応変にこういう形で共同体が成立した、というのはかなり稀有なことではないか、と考えております。

やはりフロアからご発言なさりたいという方がいらっしゃると思います。何としても発言したいという方がいらっしゃれば、時間の制限を念頭において質問していただけますでしょうか。

江口 法学部四年の江口といいます。石川先生にステータス論に関してうかがいたい事があります。民営化、あるいは規制緩和ということに関してなんですけれども、民営化というのは、樋口先生の言葉を借りますと、官に代わって民が公共を担当するということになると思います。しかし民営化において、身分の変更という側面も持っているように思います。民営化によって公務員が自分の身分に関係なく、公務員の身分を失って非公務員の身分を得ることになります。それによって保障される労働基本権の範囲というものが変更される可能性があります。こういう事態を、身分論からはどういうふうに分析・評価されることになるのでしょうか。

石川 まずこの質問に答える前提として、公務員というステータスが憲法上明示的に承認されているか、という問題があると思います。伝統的なステータスをご存知の通り、たくさんありまして、帝国大学から日本相撲協会までさまざまなステータスが存在してきたわけですが、そのなかで何が憲法上承認されているか、というと、さしあたり大学はそれであるということになるのに対して、現在いろんな意味で危機に瀕している日本相撲協会の一つの伝統的ステータスではありますが、憲法上の承認を受けている存在ではない、ということがありますね。で、公務員については、憲法によっては、たとえば、ワイマール憲法などのように、それ自体のステータスを憲法上承認するケースもありますけれども、日本国憲法はそれをしていない、と見るのが通説だ

ろうと思います。せいぜいそこに、公務員関係の自律性つまり *Autonomie* を見出すことができるかどうか、というその程度の話にとどまります。*Autonomie* があるということは、そこに一つのプロフェッションがあり、プロフェッションの自律性があるということを意味しますが、ステータスがそこにあるということまでは意味しない、ということになりますね。公務員もさまざまなプロフェッションの一つでしかない、という感じになります。ですから、民営化で身分を剥奪されても憲法上の問題にはならない、という議論になるんだらうと思うんですね。まずはそういうことです。もちろん、憲法学上の通説において、公務員関係の *Autonomie* というのを承認すべきだ、また承認したことを前提にして公務員の人権論を語るべきである、たとえば芦部先生が言われているということは、そこで憲法上語られるに値するある種のプロフェッションが、事実において存在していると評価されているということはあるのでしょう。ですので、実態としてはもちろんご指摘のような問題があるのですが、しかし、あくまでそのステータスが憲法上の承認を受けてはいないというのは、かなり大きなことですので、今述べたような議論になる、というわけです。

中島 今日のシンポジウムは何か答えを出すというわけではなくて、問い、それも一生涯かかっても解けない問いかもしれませんが、そういう問いを出すというところに意味があった、と思います。改めて三人の先生方に拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。